

サンプル問題

目白研心 中学校入学試験問題

国語

【帰国生入試】

〈注意〉

- (一) 時間は五十分です。
- (二) 問題用紙は、一ページから十ページまでありますので、最初に確認しなさい。
- (三) 問題は、からまであります。答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- (四) 筆記用具はHBの鉛筆かシャープペンシルと消しゴムを用意しなさい。
- (五) 文字はていねいに、はっきり書きなさい。

受験番号
氏名

一 次の①～⑤の——線の漢字には読みをひらがなで記し、⑥～⑩の——線の

カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 話の筋道を立てて話をする。
- ② 名画を模写する。
- ③ 客を安全な場所へ導く。
- ④ 連絡帳を翌朝届けることにする。
- ⑤ クラスのみんなで蚕を飼育する。
- ⑥ 一人でマドベにたたずんでいる。
- ⑦ 本屋で月刊シを購入して帰る。
- ⑧ チョメイな文化人。
- ⑨ 常にサイゼンを尽くして戦う。
- ⑩ 校庭をジュウオウに走りまわる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(問題作成上、本文に省略した部分があります)

① 私は、話し言葉と書き言葉の関係はピンポンと卓球の関係に似ていると考えている。温泉場には、よく卓球台がある。そこで風呂あがりややるピンポンは、およそ誰でもできるものだ。「卓球」という言葉でイメージされるのは、もう少しレベルの高いものだ。A というリズムではなくて、B といった速いテンポで気持ちよくラリーが続く、そんなイメージが卓球だ。

② 比喻として言えば、話し言葉がピンポンにあたり、書き言葉が卓球にあたる。話すことは何となくできるようなものになる。しかし、文章を読んだり書いたりすることは、練習しないとなかなかできるようなにはならない。ピンポンなら誰でもがある程度できるが、卓球となると、基本を教わるかどうかで大きく差が出てくる。話し言葉ならば、小学校高学年になれば、ある程度のレベルに達する。そのままそれほどの変化なく高校生になる例もある。読書をたくさんするということは、卓球部に入ると事情が似ている。① それを経験すると、書き言葉が身につくのである。自分が文章を書くときはもちろん、話すときにも書き言葉が生かされるようになる。

③ 卓球やテニスでは、フォアハンドはある程度の運動神経があれば何となく打てるが、バックハンドとなると、きちんと習わないとしっかりとした球は打てない。話し言葉は、フォアハンドのようなものだ。知力に応じて、各人何となくできるようになる。

④ しかし、書き言葉はバックハンドのようなもので、意識的な練習(ここで言えば読書など)を経なければ、試合で使える技にはならない。

⑤ オングは『声の文化と文字の文化』の中で、人類の言葉の歴史から見て、話すことと書く

ことには決定的な違いがあり、「自然な口頭での話しとは対照的に、書くことは、完全に人工的である」と言っている。話すことは障害がない限り、自然に話し方をどんな人間も覚える。これに対して、書くことは技術である。それは単なる技術ではなく、意識を内的に変化させるものだ。話すことが自然な行為だとすれば、書くことは自然さから離れることでもありとオングは言う。

6 書き言葉を読書を通じて身につけていくことによって、状況に巻き込まれにくい冷静でタフな知性が育てられる。読書の修練を積んだ人には、どこか冷静な知性の香りが漂う。

もちろん気質の問題は大きいですが、それでもなお冷静に自分の主観とは独立して物事を論じる客観的な構えが読書をするほど身につきやすい。

7 話すことと書くことを対立して考えるのは、生産的ではない。元来、上手に書くことができる人は、ある程度話にもまとまりがある。書き言葉ができていない人の場合は、話もまた冗長になりがちだ。一対一でプライベートで話しているときには、話し言葉の力量差は表れにくい。書き言葉をたとえ修練していなくても、話は滞りなくできる。

8 しかし、いったんフォーマルな場に出てみると、話すという行為が実は書き言葉によって精度が高められているのだということがわかる。大勢を前にして、二、三分でかいつまんで意味のある話をする技術は、高度なものだ。書き言葉をまったく修練していないと、普通はなかなか「意味の含有率」の高い話はできにくいものだ。

9 これからの時代は日本でも、このプレゼンテーションの技術がいつそう重要になる。そのときに大勢に向かって堂々とからだを開いて強い息で話す演劇的な感性や身体性も重要だが、それと同時に、論理を踏まえたキレのよい話し方が求められる。この話し方を鍛えるメニューが読書なのである。

10 自然な環境からいったん離れること。これが、書き言葉が意識に与える効果であるなら、

読書は自分を客観的に捉える視点の獲得につながっている。

11 自分自身や物事を客観的に捉えるという眼は、生まれつきのものではなく、練習して身につけられる技である。コミュニケーションは、近づくことと離れることの両方ができることによって、円滑に行われる。距離を的確に保つには、離れる技も必要だ。書き言葉が修練されていけば、状況から少し身を引き離して考えることができやすい。

12 この「離れる」という客観的な構えの形成は、読書の重要な効果の一つだ。

13 ベダンティックという言葉がある。術学的という意味で、学問や教養を必要以上にひけらかす態度のことだ。日本語で言えば済むところをフランス語で言ってみたり、誰も読んでいないような本の話をするなどで、自分の教養を誇示するような嫌味な態度を批判するときなどにも使われる。現代では、この言葉自体が死語になっている。というのは、知らないことを恥だと思ふ文化自体がなくなってしまったからだ。

14 知らないことが恥でない以上、どんなに教養をひけらかされても、聞く側にコンプレックスは生じない。それを聞いたからといって勉強するわけでもない。教養があることが尊敬されることであり、本を読んでいないことが恥だとされる前提があったからこそ、意味のない知識のひけらかしを批判する言葉も使われる意味があった。

15 普段の会話に本の話を組み入れることは少なくなった。大学生に聞いてみても、友だち同士でまじめな本の話をするのは、かつての大学生に比べると減ってきている。

16 本の話の友だちとする。

17 こんな当たり前のような会話が若い人の間であまり見られなくなってきたのは、危機的な状況だ。私は大学生たちには、「会ったら挨拶代わりに、今読んだばかりの本や読んでいる本の話をお互いにお互いを刺激するように」と言っている。お互いがお互いを刺激するようになれば、読書欲は高まる。「最近何かおもしろい本読んだ？」という質問を、何気なく天気の話でも

するように、必ず大学時代は私はしていた。せめて大学生のうちだけでも、本をめぐる会話が会話の中心になってもいいのではないだろうか。

18 こうした本をめぐる話をするの楽しさを学生自身に知ってもらうために、私は授業時間を使って、ブックリストの交換を必ず行っている。自分が読んでおもしろいと思った本を、コメント付きのリストにし、それを友だちに見せながら話をするというやり方だ。その本は、できるだけ精神の緊張をとまなうものがよい。

19 三百人ほどが、席を立てて次々に相手を代えて本についての話を楽しそうにしている姿は壮観だ。直接の知り合いでなくとも、同年代の者が読んだ本だということで、刺激を受けやすい。

20 本をめぐる話は、ただ相手の日常生活や趣味の話を聞いただけよりも、情報の中身が濃い。そして、読む気になれば、その本を自分自身が読むことができるのだから、その場の話で終わるわけではない。会話が外に開かれているのだ。

21 本や講演会などで、それ自体はおもしろいのだがそれで終わりという種類のものがある。次の行動に駆り立てられないものは、中身がよいものでも、刺激としてはもう一つだ。読めば読むほど、話を聞けば聞くほど、一人になったときに本を読みたくなる。そうした読書欲を喚起する本や講演会は、自己を広げてくれるものだ。

〔齋藤 孝「読書力」〕

- ※1 タフ……………ねばり強くたくましいさま
- ※2 修練……………学問や技術などをみがいてきたること
- ※3 冗長……………文章や話などがくどくどと長いこと
- ※4 フォーマル……………正式なさま
- ※5 精度……………機械や計器などの正確さやせいみつさのていど
- ※6 含有率……………成分・内容として中にくまれているわりあい
- ※7 円滑……………物事がとどこおりなく行われること

- ※8 誇示……………得意そうにみせびらかすこと
- ※9 コンプレックス……………他人よりおとるという気持ち
- ※10 壮観……………きほが大きくて、ゆうだいなさま
- ※11 喚起……………意識されずにいることを呼び起こすこと

問一 空らん 、 に入る語句の組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア A ポーンポーン B バシツバシツ
- イ A ポーンポーン B カンカンカンカン
- ウ A カンカンカンカン B ポーンポーン
- エ A バシツバシツ B カンカンカンカン

問二 — 線①「それ」が指している内容を本文の言葉を使って十五字以内で答えなさい。

問三 — 線②「話すことと書くことには決定的な違いがあり」とありますが、そのちがいはどのようなものですか。本文の言葉を使って、次の説明文の空らんにあうように指定された字数で答えなさい。

話すのは 二十字以内 が、書くことは 十字以内 させなければ、
できるようなならないということ。

問四 ——線③「自分自身や物事を客観的に捉える」について、「客観的」とは「誰が見てもそうだと納得できること」という意味ですが、この場合どのような見方をする事ですか。「～こと」に続く形で、本文のこれより前から二十字でぬき出して答えなさい。

問五 ——線④「ひけらかす」とありますが、「ひけらかす」の使い方として誤っている

ものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 知識をひけらかす

イ 美しさをひけらかす

ウ 学歴をひけらかす

エ 希望をひけらかす

問六 ——線⑤「現代では、この言葉自体が死語になっている。」とありますが、「死語」になるのはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 日本語ですむところをフランス語で表現するから。

イ 誰も読んでいない本の話をするのがなくなつたから。

ウ 現代では教養のないことが恥ではなくなつたから。

エ 大学生同士でまじめな話をするのがなくなつたから。

問七 ——線⑥「本をめぐつて話をする事の楽しさ」とありますが、これはどのような楽しさですか、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア お互いの好奇心を刺激する楽しさ

イ 知り合いでなくても話ができる楽しさ

ウ 教養があることで尊敬される楽しさ

エ 相手の日常生活や趣味を知る楽しさ

問八 次のうち本文の内容と合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア プレゼンテーション力を身につければ、話をする技術も上がってくる。

イ 昔も今も若者が「知らない」と言うことは恥ずかしいことではなかった。

ウ 本を読むだけでなく、刺激が生まれ次の行動につながる事が大切である。

エ おもしろい本を読んだり講演を聞いたりすることは、必ず自己を広げてくれる。

問九 この文章の前半は「話し言葉と書き言葉の関係」について書かれています。前半はどこまでになりますか。前半の終わりの段落番号を次から選び、記号で答えなさい。

ア 9

イ 12

ウ 13

エ 15

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(問題作成上、本文に省略した部分があります)

植野チヅルは小学校四年生になり、担任は角田先生で、姉の歌子の担任でもあった。今まで近くのトウモロコシ畑で遊んでいた時、おこられていた家のおばさんが角田先生だった。五月に入り家庭訪問が始まり、角田先生が家にやってきた。

「ほんとにねえ、この子は歌子とちがって、ぜんぜん、ウチで勉強しないんですよ。教科書ひらいてるの、みたことないんですから。遊んでばかりでねえ」

お茶をいれながら、いう。

「歌子は、なにもいわないでも、ちゃんと勉強してたんですけどねえ。チヅルは、夏になれば毎日プールいくし、冬になればソリやスキーで遊んでばかりだし。どうなるもんだかねえ。よろしく、お願いします」

「遊ぶのはいいですよ、おかあさん。いまのうちから勉強したら、中学まで、もちやしません」

角田センサーは平然と、切って捨てるように、いった。

① さすがの清子もすっかり気おされたように、はあと唸って、すぐまた、チヅルの欠点を思い出したように、

「ともかく、おちつきがなくなつてねえ。あきつぽいし、我慢がたらなくなつてくどくど、いいでした。」

母の清子は、子どものチヅルからみても、口は悪いわりに気が小さいというのか、家庭訪問とか病院にいくとか、尋常でない状況になると、にわかにならなくなって、おなじ

ことをくり返し、早口にしゃべることがおおい。

今回の家庭訪問のときも、チヅルはそばで聞きながら、

(おかあさんたら。そろそろ、もつと違うこと、いえばいいのに)

とやきもきしたほどだったが、ともかく、母の清子ががのべつまくなし、勉強しないの、どうしたのと言いつけたかいあつてか、角田センサーは案外とせずかで、チヅルが内心おそれていたような、お手伝いをさせるとか、小遣いをやるなどいい出すこともなく、十五分ほど帰っていったので、ホッとした。

ところが、それから何日かして、角田センサーはふいに、

「朝の集いの時間、よその組では歌をうたつたり、いろいろやつてるようです。うちの組もなにかしましょう。それで先生、考えたんだけど、本を朗読してもらおうのは、どうかしらね。

四年生らしくて、いいでしょう」

とあいかわらず、ぴしりという感じで、！マークつきの口ぶりでいいたのだった。

本の朗読のどこが四年生らしいのか、そこは謎だけれども、ともかく角田センサーは、

「そうしましょう、いいですね。本の朗読にします。じゃ、最初は植野さんにやってもらうことにしましょう。植野さん、好きな本、おウチからもつてきなさい。おウチにないときは、図書室から借りてくること。わかりましたか」

とやはり、ぴしりという感じでいいいきり、あつけにとられているあいだに、すべてが決まってしまったとしかいいようのないスピードで、決まってしまったわけだった。

あとで、仲のいいナオミたちが寄ってきて、

③ 「チヅルちゃん、どしたのさ」

と心配そうにいった。どうやら、角田センサーの怒りをかって、おしおきというか、罰をくらったように考えているらしいのだった。

いわれてみると、おしおきという点では、

(畑で、いつも、遊んでいたからだろうか)

とふと不安になったが、いくらなんでも、それだけで、朝の朗読をやらされるはずもないような気がする。そのあたりがわからなくて、家に帰って、中学生になったばかりの姉の歌子に、おそろおそろ打ち明けたところ、

「へー、朗読か。あの先生、すごく熱心で、いろんなこと、やるんだよね。カッコいいじゃん、みんなのままで朗読なんて。チヅル、どの本、読むのさ」

ひとごとだと思っ、歌子はいやにのんきであって、さすが学芸会のたんびに、主役クラスをやったおねえちゃんとは違うと感心したが、感心している場合ではない、チヅルは、数人の仲間うちでは、けっこう気をつよいこともいえるし、カヨコのような子分には強気でいられるのだが、組のみんなをまえにして、ただひとりで何かするというのは、これまでの人生で初めてとあってよく、それだけで、^④どつと恐怖がおそってきた。

とりあえず、何度も読んでいて、ところどころソラで暗記している『ヘレン・ケラー』の伝記をもっていったものの、朝の出席がおわったあと、角田センサーがじろり、といった感じでチヅルをみて、

「植野さん、本、もってきた？ ヘレン・ケラー？ まあ、いいでしょう。さあ、では、前にきて、読んでちょうだい。みんな、静かに聞きなさい」

ときばきといわれたときは、喉がカラカラになってしまった。

『アメリカのアラバマ州、カンバーランド高原をゆつたりと流れるテネシー川のほとりに……』

と読みだしたものの、声は自分でもびっくりするほどか細く、震えてくるのだった。

この、とんでもない事態に、ただひとり、はつきりと喜んでいるのが母の清子で、チヅル

が学校から帰るなり、にわかにテーブルをだしてきて、目を血走らせて『ヘレン・ケラー』の朗読を練習するのをみて、すっかり度胆を抜かれたようで、

「やっぱり四年生になると、心がまえが違ってくるんだね。角田先生は、よほど教育方針がしっかりしてるんだ。今度あったら、お礼いわなくちゃ」

^⑤とうつとり、タメ息をつくしまつだった。

チヅルはそれどころではなく、ただもう、朝の十分のあいだに、一ページでも早く読んで、^{※2}さつさと苦行をおえたいと願って、朗読練習にうちこみながらも、

(なんで、あたしだけが、こんな……)

と、まるで、マンガで読んで、ひそかに憧れていたママ子イジメにあっているような気がしてきて、

(ママ子イジメは、憧れるようなものと違うな)

^⑥と少しは現実の過酷さをしり、しよんぼりとなつてくるのだった。

本の朗読をはじめ、二週間あまりたち、その日も例によって、出席をとったあと、

「さあ、じゃ、植野さん、朗読を……」

と角田センサーがいいかけたとき、ふいに小丸スミコという女子がすつと手をあげて、

「センセイ」

と、すつと、といった感じで立ち上がった。

「どうして、植野さんだけ、朗読するんですか。ヒイキだと思います」

ヒイキということばが小丸スミコの口から出たとたん、それはさざなみのように、教室じゆうにひろがった。

ヒイキというのは、チヅルたちにとっては爆弾のようなもので、そのことばがでると、^{※4}もかく、一切合切がすべて消え去り、ヒイキか、ヒイキでないかだけが問題になるくらい、

すごい威力いりよくがあるのだった。

チヅルは、これまでの九年にわたる人生のなかで、ヒイキという輝かがやかしい立場にたったことはなく、

(なにいつてんだ、オマルは！)

とムツとなつて、うしろの席にすわっている小丸スミコをふり返つて、にらみつけたが、小丸スミコはいささかも怯ひるむことなく、ギツとにらみ返してきた。

ヒイキという羨望せんぼうと嫉妬しつとのこもったことばが、^⑦ひたひたと教室じゅうにいきわたり、ただならぬ緊張感きんちやうかんがみなぎつたと思ふまもなく、

「先生は、ヒイキなんてしません。そういうのは、めんどうだから、しないんです」
角田センサーがびしびしという感じで、いった。

やつぱり、！マークが最後についているような、すごい、いいきり方で、たしかに角田センサーなら、めんどうだからヒイキはしないだろうと、誰だれもが納得なごする口ぶりだった。

「でも、そう思うひとがいるんなら、やめましょう。やめることにします」

と角田センサーはさらにいい、そのあつけなさに、チヅルもぼかんとするばかりだったが、
続いて、

「植野さん、朝の朗読は、もういいです。今日の放課後、ちよつと職員室にきなさい」

といったときは、またまた、ぎくりとなった。

ふと視線を感じてふり返ると、小丸スミコがとなりの女子と肘ひじでつつきあいながら、にやにや笑つて、チヅルを見ていた。口もとがゆるんで、そこから銀色の歯列矯正器しれつきよせいぎががちりと光ってみえて、いよいよ意地悪そうにみえた。

(オマルのやつー！)

とすつかり頭に血がのぼり、

(このままで、おくもんか)

とは思つたが、ともかく放課後に職員室によばれるという、これまでの小学生生活で、およそ経験したことのない重大事件にすつかり心を奪うばわれて、小丸スミコことはひとまず、よそにのけておくことにした。^⑧ともかく、小丸スミコどころではなかったのだった。

その日の放課後、チヅルはおずおずと職員室にいつてみた。

角田センサーは机に向かつており、チヅルがそばにいつて、

「センサー」

と声をかけると、角田センサーはふり返つて、

「あ、きたね」

男のセンサーのような口ぶりでもいい、となりの机のイスをひっぱつて、チヅルをすわらせた。そうして、まるで化粧けしょうつけのない顔をつるりと片手で撫なでてから困つたように笑つた。

^⑨「朗読は、どうだった？」

「はあ……」

どうだったといわれても、なんともいいようがなくて黙だまっている。

「植野さんのおねえさんは、そりや、成績もよかつたけどね。植野さんだつて、いいところがあるんだから、自信もつていいんですよ。植野さんは、国語の時間、はきはきした声で、きちんと朗読できるなと先生、感心してたの。だから、朝、読んでもらつたんです。植野さんのおかあさんは、そういう授業のこと、知らないんです。おかあさんのいうことは、すこし間違つてると思いますよ。植野さん、あんた、自信もつていいのよ」

角田センサーはあいかわらず低い声で、びしびしと小枝を折るようがいい、そのいい方だけを聞けば、叱しかられているのではないかと誤解しそうなほどだったが、よくよく聞けば、なにやら褒ほめているようでもあり、それにしても、しきりと、

(おかあさんが……)

というところをみると、どうやら、あの家庭訪問のことをいつているらしい。

氷室 冴子『いもつゝ物語』

※1 尋常……ふつうのこと

※2 苦行……苦しくつらいことをすること

※3 ママ子イジメ……血のつながらない子としていじめること

※4 一切合切……何もかも

※5 羨望と嫉妬……うらやましく思うこととやきもちをやく気持ち

問一 ——線①「さすがの清子もすっかり気おされたように」とありますが、これはどのよ

うな様子のことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手に意見を押し付けられて、いらついている様子
- イ 相手に自分の欠点を指摘され、傷ついている様子
- ウ 相手に自分の意見を否定され、圧倒されている様子
- エ 相手の堂々とした意見を聞き、感激している様子

問二 ——線②「のべつまくなし」の意味を十字程度で書きなさい。

問三 ——線③「チヅルちゃん、どしたのさ」とありますが、ナオミたちはなぜこのような

ことを言ったのですか。本文の言葉を使って、三十字〜三十五字で答えなさい。(句読

点も数える)

問四 ——線④「どっと恐怖がおそってきた。」とありますが、チヅルがこのような気持ち

になったのはなぜですか。本文の言葉を使って、三十字〜三十五字で答えなさい。

(句読点も数える)

問五 ——線⑤「うっとり、タメ息をつくしまつだつた。」とありますが、このときの母の

様子の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 姉と比べて、何一つすぐれたところのないチヅルをなぐさめ、人前での朗読を得意に
してくれた角田先生の指導力を高く評価している。

イ 角田先生のおかげで、チヅルが見違えるように勉強するので、家庭訪問の時の無礼な
発言を謝らなければならないと考えている。

ウ 勉強ぎらいのチヅルが自分から朗読練習をすることに感心し、日々上手になっている
ので、角田先生にもじまんしたいと思っている。

エ 普段遊んではかりいるチヅルが帰宅するなり、朗読の練習をするので信じられず、担
任の角田先生のおかげだと思い、喜んでいる。

問六 ——線⑥「少しは現実の過酷さをしり、しょんぼりとなってくるのだった。」とあり

ますが、これはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
い。

ア 朗読練習にうちこんでいると、現実がどうかかわらなくなり、マンガのようにママ子
イジメされている気分になり、すっかり失望しているということ。

イ 朗読の練習をしていると、ママ子イジメをされているようでつらかったが、懂れてい
た状況になったのだから仕方ないとあきらめているということ。

ウ 以前はママ子イジメされるマンガの主人公に憧れていたが、自分一人だけつらい体験をさせられると、その考えが愚かだったと気づいたということ。

エ ママ子イジメに憧れるのはマンガの世界だけで十分だということを、朗読を通して角田先生に教えられ、現実の厳しさを初めて理解したということ。

問七 —線⑦「ひたひたと教室じゅうにいきわたり」とありますが、これとほぼ同じ意味の表現をこれより前から、二十字～二十五字でぬき出しなさい。(句読点も数える)

問八 —線⑧「ともかく、小丸スミコどころではなかったのだった。」とありますが、このときのチヅルの気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 毎朝チヅルが朗読することをヒイキだと言った小丸スミコを許せないと思ったが、角田先生に放課後来るように言われ、不安で他のことを考えられなくなっている。

イ 小丸スミコにチヅルだけヒイキされていると言われ、内心はうれしかったが、角田先生が突然「朗読はもういいです」と言うので、この先どうなるか心配している。

ウ 小丸スミコの「ヒイキ」という発言に、普段は冷静な角田先生が動揺し、しかも放課後チヅルから事情を聞き出そうとしているので、どう説明しようか困っている。

エ チヅルだけヒイキされていると言った小丸スミコ自身が、本当は朗読したかったのだとわかったが、チヅルを指名してくれた角田先生にもうしわけないと感じている。

問九 —線⑨「朗読は、どうだった？」とありますが、角田先生はなぜチヅルに朝の朗読をさせたのですか。本文の言葉を使って、次の空らんにあうように、三十字以内で答えなさい。(句読点も数える)

チヅルは国語の授業で「

」てほしいと思ったから。

問十 次のうち、本文の内容と合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア チヅルは姉と比べて自分は何もとれないと悩んでいたが、角田先生が励ましてくれて前向きになった。

イ チヅルは角田先生が苦手で、本の朗読も苦痛だったが、だんだん慣れて先生のこと大好きになってきた。

ウ チヅルは勉強もできて物おじしない姉を尊敬しているが、チヅルの悪口ばかり言う母親を軽蔑していた。

エ チヅルは想像力が豊かな女の子だが、ぴしりともを言う角田先生の考えは今一つわからない状態だった。

四 次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～③の空らん に漢字をあてはめ、四字熟語を作りなさい。

① 意工夫

② 取 選択

③ 品行方

問二 次の①、②の敬語として正しい使い方を選び、記号で答えなさい。

① これは恩師から「ア」もらった イ 下さった ウ いただいた」記念の品です。

② 母がお客様と「ア お話しする イ 話される ウ お話しなさる」。